

平成22年5月22日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2011

課題番号：19520402

研究課題名（和文）『哲学字彙』にみられる近代学術用語の現代日本語への定着過程の検証

研究課題名（英文）A study of the popularization of the Meiji era scholarly terms employed in Tetsujaku Jii (Dictionary of Philosophy)

研究代表者

真田 治子 (SANADA HARUKO)

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：90406611

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語学・計量言語学・学術用語・語彙論・哲学字彙・近代語研究・井上哲次郎・異軒日記

1. 研究計画の概要

明治維新前後には「客観」「法律」など数多くの新しい概念を表わす語が生じ、その結果、日本語の語彙はその基本的な部分にまで大きな変動がもたらされた。これらの語は西欧の文物受容における日本の近代化を支えただけでなく、この150年の間に現代日本語の基本的な語彙の一部に浸透し、専門分野のみならず一般的な言語生活においても必要不可欠な語彙となっている。この新しい概念を表わす語、特に専門用語の中でも学術関係の用語が明治初期に導入されてから現在に至るまでの過程でどのようにして定着、一般化していったか、また或いは定着できずに消失していったかという語彙の消長に着目し、その全体像を資料の記述的研究と計量言語学の手法によって明らかにすることを研究の目的としている。

特に明治初年から大正にかけて出版された『哲学字彙』初版・再版・三版は後世への影響が大きいと言われているが、その成立過程や他の資料への具体的な影響は明らかになっていないので、主たる著者である井上哲次郎の諸資料と併せて調査を行う。また時系列の言語データを解析する計量的な手法の研究も並行して行う。

2. 研究の進捗状況

これまでの3年間で主に下記について調査・研究を行った。

(1) 『哲学字彙』諸版の成立過程と他の資料への影響に関わる研究

この問題に関しては当初は、明治期雑誌『太陽』および現代雑誌70誌の語彙表と井上哲次郎の自筆ノートを調査対象に想定していたが、調査を進めるうちに井上哲次郎の留学中及び留学後の日記（東京都立図書館・東京大学・文京区所蔵）と、井上哲次郎が深く関わった『哲学雑誌』（戦前の号700冊）、井上と同時期に欧州に留学していた日本人の日記などに調査範囲を移行した。これらの資料によって、井上の外国語学習の状況や言語観、人物交流の状況が次第に明らかになってきた。

その結果、『哲学雑誌』に改定増補版『哲学字彙』（明治17年）に加筆した「稿本」が掲載され、それが英独仏和版『哲学字彙』（明治45年）の下地となったことがわかった。また、先行研究で改定増補版『哲学字彙』（明治17年）には複数の版種があることが指摘されていたが、『哲学雑誌』の調査から明治24年版が存在する可能性が高いこともわかった。

(2) 時系列言語データの計量的分析手法の開発

学術用語が時間とともに伝播していく様相をS字カーブに近似させて分析するため、医学等ですでに実績のある多変量ロジスティック回帰分析を時系列の語彙データに適用する手法を開発した。時系列データとしてすでに公開されている国立国語研究所の方言データ等を用いてその精度の検証を行った。

3. 現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。

(理由)

『哲学字彙』諸版の成立過程については「稿本」や明治24年版など従来知られていなかった新資料の発見につながった。また計量的分析手法の開発では共著論文が社会言語科学会第9回徳川宗賢賞をするなど一定の成果があった。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 『哲学字彙』諸版の成立過程と他の資料への影響に関わる研究

当初は明治期雑誌『太陽』および現代雑誌70誌の語彙表や『哲学字彙』三版の訳語の調査などを調査対象に想定していたが、新資料の発見によって成立過程のより詳しい状況が明らかになることが期待できる。

(2) 時系列言語データの計量的分析手法の開発

これまで試行・開発した手法の検証を引き続き行う。

(3) 問題点への対処

当初想定していたよりも調査範囲が広がったため新資料発見など新たな成果も得られたが、一方、予定した4年間の研究期間では新資料の調査は終えられない可能性がある。その場合はこの課題の期間が終了しても個人研究として引き続き調査を続けたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①横山詔一、朝日祥之、真田治子、敬語意識の変化を予測する記憶モデル—多変量S字カーブによる解析—、社会言語科学、11-1巻、査読有、2008、pp. 64-75

②横山詔一、真田治子、多変量S字カーブによる言語変化の解析—仮想方言データのシミュレーション—、計量国語学、26巻、査読有、2007、pp. 79-93

[学会発表] (計12件)

①真田治子、『哲学字彙』稿本の復元と明治24年版『改正増補哲学字彙』の可能性、第266回近代語研究会、2009年9月26日、二松学舎大学

[図書] (計7件)

①Haruko Sanada、Peust & Gutschmidt Verlag (Goettingen, Germany)、Investigations in Japanese Historical Lexicology: Revised Edition、2008年、228

②真田治子、関西大学出版部、漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成—創出と共有、2008年、pp. 353-372